次の——のついた漢字の上に、読みがなをつけなさい。
10. むだを省く。

という形式にして読ませたわけであるが、正答が約3割弱だったのにたいして、無答が約4割もあった。読めもせず読もうともしない児童が多かったわけである。また、誤答の読み誤りのおもなものとしては、「な（く）」と読んだのが最も多くて全体の約1割、以下「すくな（く）」、「のぞ（く）」、「はむ（く）」・「せい」などというのが比較的多かった。「なく」、「すくなく」「のぞく」は、いずれもこの漢字が読めず語意がわからないために、問題文の前半にある「むだを～」をもとにして、語意を推量した読み方であろう。また、「はむく」と読んだのは、語意そのものを承知しておりながら、読み方を正しく記憶していなかったか、または意味のかなり近いところまで推察しながら、この漢字の正しい音韻が定着していないための誤りと思われる。最後の「せい」は、完全な音訓の読み誤りであって、訓読みを忘れたための苦しまぎれの答えであろう。

② 漢字の音・訓を読み分ける　形の似た字を読み分ける

この分野では、計6問を提示したが、正答率がいずれも60％から80％の間にあり、一般に適切な指導がなされているものと思われる。

③ ローマ字を正しく読む

新しい学習指導要領で、ローマ字の指導量が軽減されたことはたしかである。しかしそれにしても、前回の学力テスト問題報告書で、この分野の平均正答率が56.2％であったのと比較すると、ここの44.3％はだいぶ低くなっている。ローマ字の指導が、この学年だけに限定されてしまった現状から考えて、もっと読めるようにしておきたい。

④ 辞書の引き方がわかる

次のことばを国語じてんでひくとき、どれがさきにでてきますか。いちばん早くでてくることばの記号を○でかこみなさい。
2　ア　せつぶん　　イ　せつめい
　　ウ　せともの　　エ　せぼね

上記の問題は、この分野で2問提示したうちのあとの問題である。前の問題の正答率は59.7であったが、これは26.7でたいへん悪かった。この誤答を分析してみると、全体の5割近くが、イの「せつめい」が先に出てくると答えていて、ウやエの誤答は、合わせても2割にも満たない。このことから考えてみると、「ふ」、「め」、「ぶ」という五十音図の清音・濁音の配列の順序が、先入観として頭の中にあり、こういうまちがいになって表われたのかもしれない。それにしても、辞書の利用は、国語学習では不可欠の要素であり、この学年としても重要な指導事項である。辞書活用の基礎知識である「見出し語」の配列については、ぜひとも正しい知識を与える必要があろう。

(2) 読む（語句）

この領域では、「語句の辞書的意味」、「反対語」、「同類語、同義語」、「慣用語句」、「文脈の中での語句の意味」、「複合語」の6分野について、計22問を作成し調査した。その分野別の正答率は次の通りである。（前掲の正答率表も参照）

大問番号	ねらい	小問数	大問正答率
一	語句の辞書的意味がわかる	4	57.5
二	反対語がわかる	4	63.6
三	同類語・同義語がわかる	4	67.2
四	慣用語句がわかる	2	41.0
五	文脈の中で語句の意味をつかむ	4	49.3
六	複合語がわかる	4	60.8

この中で、正答率がとくに低いのは、「慣用語句」と「文脈中の語句の意味」である。そこで、この2項目にしぼって考察をしてみたい。